

戦争への道を歩かされて

溝口 宏

昭和二年生まれの私は、十五年、戦争とともに育てられた。「ススメ ススメ ヘイタ イ ススメ」のサクラ読本で、義務教育が始まった。四年生の夏、日中戦争が起こり、河守駅頭から多くの出征兵士を見送った。慰問文も書いた。高等科二年生の昭和十六年大東亜戦争に突入した。大江山麓にまではられた。歟（くわ）の戦士、少年兵募集の美しいポスターは、私たち少年の血を、燃え立たせた。当時の色あせた通信簿には、「満州義勇軍は毎年一人以上出して下さい。」とある。戦時下の教育が一目瞭然の通信簿である。A君とY君は担任の熱心な勸奨で大陸に渡った。K君は七つボタンの予科練に入隊した。私は、興亜通信工学院に合格していたが、師範学校に進んだ。人生の最初にして最大の岐路に立たされていたわけだ。

師範教育は、皇国民錬成の教師養成の学校として、徹底した軍国主義教育であった。

軍事訓練、軍事数学：と、軍事一色であった。球技部は廃止され、庭球部から銃剣道班に変わらされた。寄宿舎は起床ラツパから消灯ラツパまで、兵営に準じた生活であった。室名は、第二小隊第四分隊と呼称した。便所に行くにも「溝口生徒かわやに行って参りませ。」と絶叫した。万事こんな調子であった。

昭和十八年、最上級生は繰り上げ卒業となり、特殊、予備学生として学徒出陣して行った。N先輩は特別攻撃隊の丹心隊員となり、比島沖に散華された。私のアルバムには、出撃直前の愛機の写真に「神鷲（わし）に続かん」と、決意を添え書きしている。

昭和十九年の夏、いよいよ私たち予科三年生にも、「教育とは勤労なり」と、学校は休業となり学徒勤労働員令が下がった。尼崎の軍需工場で神風の鉢巻きをしめ、汗と油にまみれ、飛行機生産に青春をささげた。

日ごとに空襲は激化、大阪、神戸は焦土と化し、私たちの宿舎も半壊した。工場では機銃掃射を受け、あわやの一瞬もあった。宿舎への帰途、焼い弾の雨の中、阿鼻叫喚（あびきゆうかん）の地獄を必死で脱出したこともあった。

M教官を、国賊、非国民と罵倒（ばとう）、京都へ追い返した玄関先の一時は、生涯の汚辱であった。当時のノートの寄せ書きには、級友たちの忠誠心が墨こん鮮やかである。「七生報国、尽忠、大義、忠死」と。

昭和二十年七月十一日舞鶴海軍工廠（しよ）に配置転換となり、入校式。その旬日後の二十九日、一発の爆弾で九十七名が死亡、百数十名が負傷する大惨事があった。級友九名を含む学徒十九名の若い命も奪われた。一年間同室だったM君は即死、I君は片足切断の重傷を負った。私はこの日半舷上陸で九死に一生を得た。

翌三十日は竹やぶに避難したために機銃掃

射の波状攻撃のまったただ中にさらされ、生き
たここちはなかった。

八月九日ソ連参戦の報に「玉碎するんだ、
一人一発手りゅう弾を作れ！」の命令に悲壮
な一瞬があった。

八月十五日正午、重大な放送の後、海岸に
たたずんでいた童顔の水兵が「この太陽も二
時間か」と、感慨深げにつぶやいていた。や
がて八幡大菩薩の旗を立てた潜水艦が湾口か
ら消えていった。

宿舎への帰途、若宮神社境内で担任から放
送の詳細を聞き、私たちは号泣した。

私たちは、敗戦の日まで必勝を信じていた
。

戦後教壇に立った私は、「子供たちには決
して私と同じ道を歩かせてはならない。」を信
条とした。教育とは、人間とは、を自らに問
い続けてきた。生ある限り戦争の悲惨さ、平
和の尊さを語りついでいきたい。戦争体験者
の義務である。亡き級友たちへのせめてもの

供養である。